

仙台大 エース熊原 Vの立役者

仙台六大学野球

総評

仙台六大学野球春季リーグは29日、仙台大、東北学院大、東北福祉大による史上初のプレーオフの末、仙台大が67季ぶり3度目の優勝を果たして閉幕した。力はありませんながら2009年から万年3位に甘んじていたが、福祉大、学院大の壁を乗り越え、一気に頂点に駆け上がった。

立役者となったのが3年の右腕熊原健人。プレーオフも含めて無傷の6勝を挙げた。150キ前後の直球を武器に、最終節まで計47回を投げ50奪三振、防御率1・71と抜群の安定感を

学院大2位 3右腕がけん引

見せた。

制球力をつけるため、冬場にセットポジションからの投法に固定。フォークボールも習得し、一躍リーグを代表する投手に成長した。

リーグ通算22勝の4年生左腕野口亮太、球威がある1年生右腕馬場卓輔も投手陣を支えた。

打線は昨秋に打率、本塁打、打点の3冠に輝いた2

年松本桃太郎が今季も最多本塁打(3)、最多打点(14)を記録。2年の3番大坂智哉ら脇を固める打者も勝負強かった。

2位の学院大は、3人の右腕投手がチームをけん引した。4年大山将、3年本田圭佑が試合をつくり、4年加藤裕樹が締める勝ちパ

ターンを確立。プレーオフで福祉大を下したが、仙台大戦で頼みの加藤が打たれ優勝を逃した。

3位の福祉大は投手の柱が不在で、ここ一番で踏ん張れなかった。打撃陣はリーグ1位タイの14打点、同2位の打率3割4分9厘の4年宮本涼をはじめ長打力を兼ね備えた好打者が多かったが、得点圏であと一本が出なかった。

東北大は、打率3割8分2厘で首位打者に輝いた4年三富崇永を中心に打線が活発で、19季ぶりの単独4位に浮上。5位の工大、6位の宮教大は攻守に精彩を欠いた。

上位3校の力が拮抗(きっこう)し、プレーオフも好試合が続いた。全日本大学選手権に初出場する仙台大は、切磋琢磨(せつさく)して培った力を発揮して恥じない戦いをしてもらいたい。(加藤伸一)